

構文理論と言語習得

藤井 聖子

本稿では、構文理論がどのような言語観に基づいているか要点をまとめながら、その言語習得観を概観したい。

1. 言語習得と言語理論

これまでの研究史を振り返ると、言語習得をどのように捉えてどのような習得研究を展開するかは、どの時代も各々の言語理論に大きな影響を受けてきていることが分かる。また逆に、言語習得をどのように捉えるかということは、言語理論構築(少なくともその基本的指針と研究の方向性)に重要な影響を与えてきたともいえる。例えば、チョムスキーが人間に生得的な Universal Grammar (普遍文法、U.G.) の存在を提唱しそれを解明するための研究プログラムと言語理論を構築した出発点は、poverty of stimulus (刺激の貧困)、Plato's problem (プラトンの問題)、logical problem (論理的問題) などと呼ばれるように、子供が言語インプットから得る positive evidence のみによって言語を習得できるはずがない(論理上不可能である)にもかかわらずどの子供も一様に母語を習得することができるのは、人間が生まれながらに持ち備えている文法能力によるものであると考えざるをえない、という前提の命題であった(Chomsky 1986, etc)。この前提を出発点とし、その生得的文法能力を特徴づけるための画期的な言語理論を展開してきた。

言語観と言語習得観とは表裏一体であるため、言語の何に目をつけ、何を問題とし、何を研究対象・課題・目的にし、何をデータとし、どのような方法で研究を進めるかが、言語理論と言語習得理論とを通し一貫して規定される中で、理論構築・実証的研究が展開してきている。

構文理論は後で紹介するように複数の理論的流れの中で発展してきているが、それらに共通する点のひとつに、人間の言語能力の豊穡性とそれを習得する人間の認知能力・学習メカニズムの複雑さを探究していく視座が挙げられる。Construction Grammar (Fillmore 1985, 1988, 1989, Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Goldberg 1995,

Kay & Fillmore 1999, Michaelis & Lambrecht 1996, Östman & Fried to appear, etc.) の中心的提唱者フィルモアが指摘していることの中に以下の問題がある。一般的抽象的統語規則(例えば U.G. で規定される統語規則)の知識をもち、個々の語彙を学び、その統語規則を各々の語に当てはめたとしても、自然な発話としての文を生成したり正確に理解したりすることができない言語現象が、言語の重要な部分を占めている、という観察である。また、言語ユニットの構成要素の知識によってユニット全体の意味を理解することはできても、意図する意味としてどのように構成要素を組み立ててそのユニットを産出するのか(その言語を習得した母語話者でなければ)正確に予測できない場合——すなわち、構成要素の知識の総和によって decoding はできるが encoding ができない場合——が言語現象として頻繁に起こる。これらの問題は決して言語の「周辺部」(core ではない periphery) として研究対象から除外してしまえる現象ではなく、言語知識の重要な部分を占めており、人間が言語を習得するということはこのような部分の習得をも含めて言語知識を形成するということである、とみるのである。個々の語彙知識と抽象的統語規則とだけでは言語習得に至らない、その言語の実態を埋めるものは一体何なのか、という真摯かつ素朴な問いかけである。このような視座に立って言語理論が構築される時、言語知識解明には、一般的統語規則と個々の語彙知識のみでなくそれらを統合する「構文的知識」を解明することが不可欠であり、この“construction”(適切な訳語ではないが「構文」と呼ぶことにする)を基本単位とした言語理論と研究プログラムが展開されることになる。

言語理論と密接な関係にあるのが、上でも触れた言語の生得性と学習メカニズムに関する考え方である。言語習得理論における両極的考え方には、よく知られているように経験説と生得説とがあり、20世紀初頭以来の両説のディベートは長い間続いている(Pinker 1994 vs. Tomasello 1995, さらに Elman *et. al.* 1996 を参照されたい)。しかし、近年の生得性に関するディベートは、生得的能力があるかないかという単純命題に関してではなく、何が生得的能力か、それがどのようなメカニズム・プロセスで言語習得に寄与するのかというディベートに変容してきた。¹⁾ さらに Tomasello (1999) は、何が生得的能力なのかはわかっ

たとして、そこで我々の探究が終わるのではなく、それがより重要な研究課題に繋がらなければ意味がない、と主張している。

... the goal is not to decide whether some structure is or is not "innate," but rather to determine the processes involved in its development. The search for the innate aspects of human cognition is scientifically fruitful to the extent, and only to the extent, that it helps us to understand the developmental processes at work during human ontogeny, including all of the factors that play a role, at what time they play their role, and precisely how they play their role. (Tomasello 1999: 51)

このような科学観から、文化的コンテクストにおいて子供の初期の言語活動や子供と大人との言語的相互作用がどのように起こり、どのように言語能力が発達するのかを綿密に探究してきているTomasello (1988, 1992a) が、習得研究の拠り所として求めた言語理論が、構文概念を軸にする理論—Usage-based Model¹⁾ や Construction Grammar—である (Tomasello 2000, 1999, 1998, in press; Tomasello & Brooks 1998; Diesell & Tomasello in press, etc.)。

2. Construction という概念

構文理論では、言語を構成する基本的単位は、“construction”である、と考える。constructionは、形式と意味(機能)とが対応して形成する単位である (Fillmore 1985, 1988, etc.)。語の意味に関してソシュールが形式と意味との対応を“sign”

1) Slobin (1988) が “Confessions of a Wayward Chomskyan” という基調講演の中で、自らの研究史を吐露しつつ以下のような呼び掛けをしている。かつて自分もチョムスキーの言語理論—生得的な文法能力—を踏襲して言語習得研究を行ってきた。が、その前提論理そのものが人間の認知構造と「学習メカニズム」に関する “poverty of imagination” ではなかったのか。我々の学習メカニズムに関する理解そのものが探索中であり、不十分な学習・認知理論から考えれば文法規則を学習できるはずがない(よって文法能力そのものが生得的である)と結論づけることになるが、スキーマ理論やコネクショニズム・並列分散処理 (Connectionism, PDP) を始めとする新しいパラダイムの学習理論の展開の中で、新しいパラダイムの言語理論の展開と合わせて、人間の認知構造と学習・言語習得のメカニズムをより深く探究する必要があるのではないか、という呼び掛けであった。

2) Langacker (2000), Barlow & Kemmer (2000), etc.

(記号)と捉えた基本的見方に通じるものであるが、文法構造全体を、同様に形式と意味(機能)とからなる“sign”(記号)と捉える。

構文理論は、現在まで複数の関連する理論が相互に影響しあう中で発展してきている。このプロセスの中で“construction”の基本的定義付けや特徴付けに関して、Fillmore (1985, 1988, 1989), Langacker (1987), Goldberg (1995), Croft (forthcoming) の間で、微妙に焦点の異なる文言が提示され、構文の(構成要素からの)合成性と予測可能性において程度差がみられる。さらに、Thompson (2001) では用法依存性がより強調され構文判定段階から第一義的に最重要視されている。このような差は、着手する研究の焦点のバリエーションと研究対象の広がり示すもので、あくまで一貫した言語観に基づいており、相補的に構文理論構築と展開に貢献している。

以下に、その一貫した言語観・文法の捉え方・言語分析へのアプローチとして挙げられる点をまとめてみる。

(1) 意味と形式:

文法知識は意味と形式との両者からなり、意味から切り離された形式的統語能力の自律性 (autonomy of syntax) を前提にして文法を規定することはできない。

(2) 規則性と個別性:

言語の規則的な部分と構文項目ごとに個別的・定型的な部分との両者が、文法能力を構成する。後者は、例えば、構文の慣用性 (idiomaticity) であり、個々の特異性 (idiosyncrasy) である。よって、言語の規則性・一般化可能性と個別性・慣用性との両者を含む文法理論を構築し、その両者の知識の関連も解明する必要がある。

(3) 語彙と文法:

語彙知識と統語的構文知識とは連続性をもっている。また、構文は、(頻繁に) 参与する語彙項目によって特徴付けられることも多く、ときには、構文のあるスロットが特定の集合の語彙項目で定型化された構文も認められる。逆に、語彙知識は、その語が参与する構文環境の知識とともに形成されている。

(4) 言語知識と言語使用:

言語知識は言語使用から切り離されたものではない。さらに、言語は、具体的な言語使用・用法に依存して、発生したり変化したりする。“competence” と “performance”, あるいは、“I-language” と “E-language” とを別々のものと切り離し前者のみを研究対象

にすることで文法能力が解明できるという見解ではない。)

(5) 言語能力と認知能力:

人間の言語能力は、認知能力の一部として捉えられるべきものであり、言語に特殊化された特徴はあるにせよ、一般的認知能力と切り離された自律的な言語能力の存在を前提にして言語能力を解明することはできない。

3. 習得研究の観点

上述のような構文理論の考え方から言語習得を考えると、以下のような言語の局面が前面に押し出され、重要な研究課題となる。

- (1) 意味の習得と構造の習得
- (2) 個々の言語項目の習得と一般化・一般的規則の習得
- (3) 語彙の習得と文法の習得
- (4a) 言語使用と言語能力の発達
- (4b) 社会的文化的コンテクストにおけるインターアクションと言語習得
- (5) 認知能力の発達と言語能力の発達

上記それぞれの問題において「A と B」と並列された要素を無関係のモジュラーとして切り離して分析するのみでよいとするのではなく、A と B 両者がどのように相互作用をもちながら習得されるのか、ということの問題とする。以下、それぞれの問題を、理論的背景と照らし合わせながら考えてみる。(それぞれの切り口は一貫した言語観によるものであり、無論相互に密接に関連している。)

3.1. 意味の習得と構造の習得

前述のとおり、言語は“construction”の集合体であり、“construction”は形式と意味(機能)とが結びついて形成する単位である、と捉える。このような言語観では、文法構造の知識やその習得が意味の理解や習得から切り離されているということを前提とし各々を別個に研究すればよいとするのではなく、両者の相互関係を探究し、構造習得の機能的動機付けを探究することが課題となる。例えば、Subjacency と呼ばれる制約(およびその習得)は、機能・認知面からの記述と説明が可能であることを van Valin (1991, 1998) が示している。

形式と意味との対応の習得の重要な一側面は、多義性の習得である。ひとつの形式に複数の関連するが微妙に異なる意味が結びついている場合、

それらはどのように習得されるのであろうか。この観点から、Johnson (1999) は、英語の動詞“see”の多義性の習得に関する研究を、構文間の関係付けの習得の考察とともに進めている。英語の動詞“see”には、視覚として「見る」という物理的な意味と「分かる」という認知的意味とがある。Johnson は、二つの意味が融合する構文の用法を土台に意味習得が起こる、という仮説をたて、子供が多義性と構文間の関連を習得していくプロセスを分析した。「融合仮説」で予測されるとおり、物理的な意味を使用する初期段階の後、両者の意味を包含する構文用法(視覚的経験場面において wh-complement とともに see を使う用法で、この場合、視覚的意味に加え視覚的経験がもたらす認知的プロセスに子供が着目する)を経た上で、しだいに視覚的経験場面以外で wh-complement とともに see を使い始め両者の意味の分離が発達する、ということを示した。

3.2. 個々の言語項目の習得と一般化・一般的規則の習得

言語習得には、項目ごとにケースバイケースで学ぶプロセスと広く一般に通用する規則性を学ぶプロセスとの両方が必要である。

まず大切なこととして、言語習得初期において、子供が項目ごとにひとつひとつ学ぶ現象が顕著であり、習得プロセスに不可欠であることが、明らかになってきている(Akhtar & Tomasello 1997, Diessel and Tomasello in press, Tomasello 1992b, etc.)。Tomasello (1992b)は、習得初期は Verb Island Construction と呼ぶ構文(ある特定の動詞に特化された具体的な構文)を中心に進むことを綿密なデータ分析に基づき示している。この Verb Island Construction は、子供の発達段階・習得環境に応じて、ある一定の動詞と統語的要素(語順や格標識など)で表される意味関係部分が具体的に特化されている点が特徴的であり、抽象的な概念をとり変数となるのは、事象・事態の参与者のスロットのみである。Tomasello (および共同研究者)はこのような研究をあらゆる言語現象において展開し、子供の言語習得は大人の言語能力の抽象的規則を出発点・起源として発達するのではなく、言語使用においてある語彙項目に特化された具体的な構文を軸に項目別(item-based)に進むことを示している。さらに、このような事実から、大人のもつ抽象的統語規則を前

提にした言語習得理論は支持し難いことを論じている (Tomasello 2000)。

同時に、項目ごとに学ぶ要素のみでは大人の目標言語能力には至らず、何らかの方法で、子供が言語インプットから一般化をしていることも、認められている (Slobin 1997, Tomasello in press, etc.)。上述の Tomasello らの研究は、いつどのように一般化・一般的規則の習得が起こるのか、語彙的に特化された項目別構文用法の段階からどのように構文の生産性や構文の組み合わせの習得に至るのか、という観点からも、綿密なデータ分析を進めている。Tomasello, Lieven, Behrens, & Forwergk (2000) では、子供の自然発話資料³⁾を細かく調べ、子供が生産的にある構文を使い始める直前には、必ず、語彙的に特化された項目別かつ具体的な構文を使用する段階がある、と結論づけている。Goldberg (1999) も (Goldberg 1995 に基づき)、同様の双方向的観点から項構造の習得の研究に取り組み、項構造の習得がある項目別(動詞別)に進むこと、さらに、それらの語彙的に特化された構文をプロトタイプとして構文構造の一般化の習得が可能になっていることを、論じている。

3.3. 語彙の習得と文法の習得

上の 3.2. 項の問題と関連して、語彙習得と文法習得との関係も見直されてきている。

Bates & Goodman (1997, 1999) では、これまでの研究史の評価・総括をした上で、子供の語彙習得と文法習得には密接な関係がある、という結論を心理学的研究に基づいて提示している。その関係は、“Grammar from the lexicon” という Bates & Goodman (1999) のタイトルからも分かるように、語彙習得に応じて文法習得も進む、というものである。Bates & Goodman らは、このような語彙習得と文法習得の実態を実証的に探究しながら、Construction Grammar などの言語理論における語彙と文法の捉え方——語彙知識と統語的構文知識とは連続性をもっている——を、習得の実態に適合する考え方として選別している。

前項で述べたように、語彙的に特化された具体

的な構文の使用とその蓄積が、生産的な構文構造の習得に繋がるとすれば、語彙習得と文法習得の問題は、単純に切り離して考えられる問題ではないことになる。この現象の分析には、語彙的特化性と生産性・一般性の両者を包含する構文というユニットが、重要な役割を果たす。

3.4. 言語使用・社会的コンテクストにおけるインタラクションと言語習得

言語知識は言語使用と切り離されたものではなく、言語使用において言語が習得される、という基本的な見地は、構文理論展開の中で、Fillmore (1989) などに明示されている。ここでは、インプットの役割も単に外的刺激に浸ることという捉え方ではなく、社会的コンテクストでのコミュニケーション意図と意味理解を含むインタラクションの一環として捉えられる。

第 1 節で 20 世紀初頭の行動主義学習理論に基づく経験説に触れたが、その後社会文化的コンテクストにおいて子供が経験から学習するプロセスについて見直され、新しい研究が理論・実証的分析ともに展開している。例えば、Carpenter, Akhtar, and Tomasello (1998) は、幼児の携わる「模倣」という活動そのものも、単純な機械的なものではなく、14~18 カ月の幼児が大人の意図ある言動は模倣するが偶発的な言動の模倣は半減する傾向をみせることを示した。Tomasello (1999) 他は、生後 9~12 カ月頃顕著になる幼児の大人の意図ある行為を理解する能力やコンテクストにおいて他者と“joint attention”をもつ能力などを明確にし、幼児にとって他者との共同認知活動が起こりコミュニケーション意図が関与する“cultural learning”のプロセスを探究している。模倣学習なども、このような“cultural learning”の一環として起こる場合、言語習得に大きな意義をもつ。

3.5. 認知能力の発達と言語能力の発達

これらの研究では、言語習得が非言語的・一般的認知能力との関連において探究されている、という点を最後に添える。Tomasello (1999) 等において明らかにされてきているのは、幼児が他者の存在を理解したり、視線をあわせたり、他者との共同認知活動に携わったりする能力と、それらの能力の言語発達との関連である。先に挙げた Tomasello (1992b) の Verb Island Construction

3) Tomasello *et. al.* (2000) は、このような研究目的のためには、子供の自然発話資料の一般的な収集方法に比べ、高頻度に極めて短い間隔で(毎日 1 時間週 5 日)自然発話録画を行い、毎日の発話をすべてきめ細かく分析する必要があるとし、それを実行している。

では、動詞と統語的要素で表される意味関係部分が具体的に固定している一方、事態の参与者の部分は生産的であった。子供が事態の参与者の概念を理解し、そのスロットに適合する概念を抽象化し変数として捉えることができるのは、共同認知活動の場面において参加者という概念を認識することができる非言語的・一般的認知能力によるものである、という仮説も提案されている。

3.4. および 3.5. 項でまとめたような Tomasello らの習得研究のバックボーンにあるのが、認知能力と言語能力の発達に関するヴィゴツキー(1934 [1932]) 的見地である、といえるだろう。人間の言語能力は認知能力の発達とともに発達する、また、人間の認知は言語(などの文化的相互作用)を介して発達する——文化的環境・相互作用の中で、認知と言語とは螺旋状の発達軌道をとる。

4. おわりに

以上、構文理論の言語観の要点をまとめながら、その言語習得観を概観した。(1) 意味と形式、(2) 規則性と個性(慣用性、語彙的特化性、項目別特異性)、(3) 語彙と文法、(4) 言語知識と言語使用、(5) 言語能力と認知能力、という五つの観点から、構文理論における文法の捉え方・言語分析へのアプローチとそれに対応する言語習得研究の課題を指摘した。

習得研究は、その仮説や理論構築において、大人の言語能力をどのように理解するかが、習得の目標能力を理解する上で重要であるため、構文理論の言語観からみて言語習得研究の指針が決定されている面もちろんある。しかし、一方で、長年言語習得研究に携わってきた研究者が、習得の実証的研究から分かる事実や実態に適合する言語理論を模索し選別してきている面もある。

構文理論のアプローチでは、言語分析においても習得研究においても、構文間の関係を明らかにする、という大切な課題があり、あらゆる考え方・仮説が提示され検証されつつある。また、演繹的操作で予測可能ではない側面をも重視して言語を捉えようとする帰結として、motivation のメカニズムが探究される。この点に関しては、プロトタイプからの意味拡張など意味習得に関して重要な知見を生み出してきている認知言語学が、大きな貢献を果たしてきた。その試みを、構文理論の展開では、形式と意味・規則性と語彙的特化慣用性・合成性と非予測性・語彙と文法を包括す

るユニットとしての constructions を綿密に分析していくことで、相補的手法で構文間の関係や motivation のメカニズムの解明に貢献することができるだろう。

参考文献

- [紙面の関係上、本特集に前出の項目は割愛した。Croft (forthcoming), Fillmore 1988; Fillmore, Kay & O'Connor 1988, Goldberg 1995; Kay & Fillmore 1999; Langacker 2000; Michaelis & Lambrecht 1996; Tomasello 1998 は、大塚論文を参照されたい。]
- Akhtar, N. & Tomasello, M. (1997) Young children's productivity with word order and verb morphology. *Developmental Psychology*, 33(6), 952-65.
- Barlow, M. & S. Kemmer (2000) *Usage-Based Models of Language*. CSLI Publications.
- Bates, E. & J. C. Goodman (1997) On the inseparability of grammar and the lexicon: Evidence from acquisition, aphasia and real-time processing. In G. Altmann (ed.), *Language and Cognitive Processes* (Special issue on the lexicon), 12: 507-86.
- (1999) On the emergence of grammar from the lexicon. In Brian MacWhinney (ed.), *The emergence of language*, 197-212. Lawrence Erlbaum Associates.
- Carpenter, M., Akhtar, N., & Tomasello, M. (1998) Fourteen-through-18-month-old infants differentially imitate intentional and accidental actions. *Infant Behavior and Development* 21 (2), 315-30.
- Chomsky, N. (1986) *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. Praeger.
- Diessel, H. and M. Tomasello (in press) The development of relative clauses in spontaneous child speech. *BLS* 26.
- Elman, J., Bates, E. A., Johnson, M. H., Karmiloff-Smith A., Parisi, D., & Plukett, I. (1996) *Rethinking innateness: A connectionist perspective on development*. M.I.T. Press.
- Fillmore, C. J. (1985) Syntactic Intrusions and the Notion of Grammatical Construction. *BLS* 11, 73-86.
- (1989) Grammatical Construction Theory and the Familiar Dichotomies. In R. Dietrich, & C. Graumann (Ed.), *Language Processing in Social Context*. Elsevier Science Publishers B. V.
- Goldberg, A. (1999) The emergence of the semantics of argument structure constructions. In Brian MacWhinney (ed.), *The emergence of language*, 197-212. Lawrence Erlbaum Associates.
- Johnson, C. R. (1999) *Constructional grounding: The role of interpretational overlap in lexical and constructional acquisition*. Ph.D. Dissertation. University of California at Berkeley.

(70 ページ下欄につづく)

(16 ページよりつづく)

- Langacker, R. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar 1*. Stanford University Press.
- Östman, J. & M. Fried (eds.) (to appear) *Construction Grammar(s): Cognitive dimensions*. John Benjamins Publishing Co.
- Pinker, S. (1994) *The language instinct: How the mind creates language*. William Morrow.
- Slobin, D. I. (1988) Confessions of a Wayward Chomskyan. *Papers and Reports on Child Language Development*, 27, 131-36. Stanford University.
- (1997) The origins of grammaticizable notions: Beyond the individual mind. In D. I. Slobin (ed.), *The crosslinguistic study of language acquisition: Vol. 5: Expanding the contexts*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Tomasello, M. (1988) The role of joint attention processes in early language development. *Language Sciences* 10, 69-88.
- (1992a) Social bases of language acquisition. *Social Development*, 1 (1): 67-87.
- (1992b) *First verbs: A case study of early grammatical development*. Cambridge University Press.
- (1995) Language is not an instinct. *Cognitive Development*, 10: 131-56.
- (1999) *The cultural origins of human cognition*, Harvard University Press.
- (2000) Do young children have adult syntactic competence? *Cognition*, 74: 209-53.
- (in press) A usage-based approach to child language acquisition. *BLS* 26.
- Tomasello, M. & P. J. Brooks (1998) Early syntactic development: A construction grammar approach. In M. Barrett (ed.), *The development of language*. UCL Press.
- Tomasello, M., E. Lieven, H. Behrens & H. Forwergk (2000) Early syntactic creativity: A usage based approach. Submitted for publication.
- Thompson, S. A. (2001) Constructions and conversation. A paper presented at the 7th International Cognitive Linguistics Conference.
- van Valin, R. (1991) Functionalist theory and language acquisition. *First Language*, 11, 7-40.
- (1998) The acquisition of Wh-questions and the mechanisms of language acquisition. In M. Tomasello, *The new psychology of language: Cognitive and functional approaches*. Erlbaum.
- Vygotsky, L. S. (1934 [1932]). *Thought and language*. M.I.T. Press. (東京大学助教授)